

會



報

1956年3月

184

日本山岳會

第三次マナスル

登山隊食糧計画

日下田 実

すでにマナスルだけでも過去二回、その他、アンデス、アンナプルナ、カラコラムなどの幾度かの海外遠征を行い、大体日本人向の食料はどんなものが最も適するかということは一応解答が出ていると思う。今までヒマラヤなどは特に大いなる食料は日本から持つて行き、また向うへ到着しても人の背によつて運搬されるものであり、また高所においては調理が面倒だつたりするのは避けられれた。折角高所まで持つて行くからには栄養価の余り低いものでは大変損をすると考えていた。しかし五三年、五四年のマナスルの経験をもつてすれば、あなたがちそうとばかりいい切れないように思う。一般にわれわれ日本人は、大食の割に非効率的に栄養を攝つていといわれており、また自身もそう思わざるを得ない立場にある。しかし、このことはわれわれの先祖伝来の何世紀にもわたつて続けられていたものでありこれをなおすのにはまた恐らく何年もの時間を必要とするであろう。そこで外国のヒマラヤ遠征隊の真似をして、高カロリーの食料計画を樹てても大ていは失敗する。失敗しないにしても隊員全体をえらい不愉快な状態にしてしまうということが立証された。従つて今次の遠征隊の

食料の基本方針として、栄養価の高いもの、目方の軽いもの、調理の簡単なものと、いわゆる食料原則の外に、高所またはキャラバン中にうまく食べられるもの、すなわち食欲をそゝるものをそう入した。前者の条件にさほど適合しなくてもうまいものはなるべく持つて行くようにした。以上の如き原則に従つて一九五六年日本ヒマラヤ遠征隊の食料計画の大綱を次の如く決めた。

今回の食料は使用する場所により次の三段階、①カトマンズ・サマ間のキャラバン、及びベースキャンプにおける食料、②C I・C V間の食料、③C VI・頂上間の食料の大きく三つに別けた。この別け方は食料の内容ももち論異つてくるが、配分方法も全然異つて来る。以下各段階における、内容の違い、また配分方法の特徴について記すことにする。

①キャラバン、ベースキャンプ用食料。

大体わが国の遠征隊は出発前すなわち準備期間に各隊員はいゝ加減精神的体力的に消耗してしまつて。従つて、カトマンズからBCまでのキャラバン中、またベースキャンプ滞在中は非常に貴重な期間となり、この間に各隊員とも体力を恢復し、精神的にも宜くなつて来る。従つてこの期間にも各隊員に好きなものを充分に食べさせて、山登りに充分な体力をつけさせたいし、またそこまで行かなくともそれ以上に体力を落とさせるとは出来ない。ともかく出来るだけわれわれの普通の食生活をそのまゝ延長したいと考え、出来る

だけ日本食に近いものを揃えた。特に毎日二食は米を使用し、(これはアルファ米を使用)味噌汁も八丁味噌を利用して作ることとした。五四年は粉味噌を使用したが大してうまくはなかつたし、今年いろいろ探してみたが全然まずいので、少々重いけれども八丁味噌を使用することにした。醤油も五四年には粉醤油を使つたが、これも余り評判が良くはなかつたので、今年は少々重いけれども普通の醤油を確詰にして持つて行くことにした。實際考えてみれば醤油はなくても別にどうということはないけれども、少しでもあればわれわれの単調な生活が、大分救われるだろう。その外漬物の確詰類(佃煮、干物類など一応の物も揃えた積りである。シエルパ用の食料の大部分はわれわれと同様であるが、ツアンパ、トールガラシ、ニンニク、カレー粉、メリケン粉などは、現地カトマンズで調達する。なおこの期間現地で調達するものは、マトン、ニワトリ、ニワトリの卵、或る種の果物など(バナナ、パパイヤなど)はキャラバン中、時々購入する。

②中間キャンプ用食料

今次の計画ではC I・C Vまでの間で約一カ月余生活する。キャラバン中は毎日環境が残り退屈することはないが、この間は殆ど毎日が雪と氷の間に生活し、生活が単調な上に、食料までが単調ではやり切れない。おまけにキャラバン、ベースキャンプ用食料のように重たかつたり、調理が面倒だつたりすることは許されない。この間の食料は従つて、十二人一

日の食料と、その外に特殊食料の箱を用意して出来るだけ単調さを防いでいる。

主食としてはアルファ米を主とし時々マカロニ、オートツを併用する。またシエルパ用としてツアンパを或る程度用意した。昼食用のビスケットはどうしても飽きてしまうので、各種類のビスケットを用意し、同じものが毎日続かぬようにした。スープ類も同様である。その外乾燥野菜、乾燥果物、粉ミルク、粉末ジュース、砂糖などは五四年の時と大体同様である。このような食料で一人一日当りの攝取カロリーは約三千五百、重量は約一・二キロである。

③高所用食料

この期間において、重量の面、炊事の面、食欲の面で食料はえらく制約を受ける。重量、調理の点ばかり考えたコンパクトな食料ではいやになつてしまふし、余り食べられなくなつてしまふし、そうかといつて皆が食べたいというものがかり持つて行つたんでは動きも取れなくなつてしまふ。従つてこの間の食料は大体次のようにした。

いわゆる高所用レーションは一人一日を建前とし、その中半分はアルファ米を使用し、半分はオートツを使用した。内容はアルファ米以外は、大抵お湯を沸すだけで、調理の面倒はないものばかりである。しかしこのレーションだけでは、満足ではないのでやはり特殊食料の箱を用意して或る程度選択出来るようにした。またノース・コルに重いけれども確詰のジュースを少々上げることとした。これ

は大体ノース・コルからさらにブラトリーに前進する隊員にとつては相当有効な力を発揮するものと思ふ。

以上が第三次マナスル登山隊の食料計画の概略である。これでお判りのようにこの計画は飽くまでも前何回かの経験を基礎として組立てられたものである。従つて今回の遠征においても、量的過不足は別として、大體間違いないものであると思ふし、また量的な問題にしても、絶対に不足を来すことはないはずである。またこの中間報告や結果報告はいずれまた発表する機会があると思う。またこの食料はマナスルに行つて威力を発揮するものであつて、これらの食料を用意して日本の山に行つてもどれだけの効果があるかはちよつと疑問に思われる。最後に會員の皆様方のご援助によつてこれらの食料計画が整つたことを深く感謝致します。

ロー・ツエの攻撃

ロー・ツエ（八五〇一米）への遠征について会報一七八号に予報しておいたが、これは予定が変更され秋に実行されたその遠征隊の最後の場面の報告である。

米国籍のノルマン・G・ディレンフルトを隊長とする一九五五年の国際隊（米国、スイス、オーストリー）は、モンスリーかけての酷い暴風雪の時期まで続いてしまつたため、山のコンディションが非常に悪く、登頂には結局成功しなかつた。

しかしエルンスト・ゼンが大胆な単独行で八一〇〇米の高度に達したのは確かに偉かつたし、また凄じい新雪と吹雪に抗して全員が無事故で下山出来たことは賞讃に値する行動であつた。

クレーン氷瀑の突破に際しては新雪とそれによる輻射熱のために登山隊は可なりな苦勞をしたようであるが、携行した木製及びアルミ製の梯子のお蔭で、比較的短期間の内にこの難場を乗り越えることが出来た。C1はその結果として英国隊（一九五三年）の場合と違い、氷瀑の上、クレームの入口に当る六一〇〇米の地点に設置した。しかし新雪雪崩が頻繁に発生するため、それ以上の前進は一時的に阻まれていた。その間九月の下旬に入つてスイス班（Arthur Späth, Dr. Bruno Spring）とアメリカ班（George I. Bell, Fred Peckey, Richard McGowan）の隊員がB Cに到着した。

九月二十五日にゼンとシュペーエルの二人は六四五〇米のC2へ進んだ。同二十七日、ゼンは初めてロー・ツエの壁を間近かに見る位置に達したが、硬雪と粉雪に悩まされながら、身体の調子のよかつたゼンは、終始シュペールのアルバイトを続け、十月の一日に漸くロー・ツエ壁の下部七〇〇〇米にC3を建てた。しかし引続く多量の降雪のため隊員はC1に一旦退却した。積雪は一米に達した。

十月七日、ディレンフルト隊長、ゼン、シュペーエルの三人が、やつとC3に戻ることが出来た。次いでC4を作つてから十月十日に頂上攻撃を執行する手筈になつた。

た。シュペール・アルバイトは相変らずゼンの肩にかゝつていた。酸素の助けを借りながらゼンはC4から腰まで潜る深雪をわけ、ロー・ツエ壁の最上部テラス（七五〇〇米）へ登りついた。しかし連れて行つたシュエルバ達が多量に凍まつたので、酸素ボンベを置いて一まず下降することにした。

第二回目の頂上攻撃は十月の十五日と定め、C5を引返し点に設置することに決定した。予定に従ひゼンとシュペールは棚に達したが、酸素ボンベが雪に埋まつてしまつて一本も見つからない。これで万事窮すである。そこでゼンはありつただけのボンベを担いで独りで登高を続け、急峻なリネネの中間の硬雪を掘り進むこと一時間、八一〇〇米の高度に達して遂に退却を決定した。ゼンは翌日をC5に独り過し、万一の好天を狙つて三度目の、そして最後の攻撃をやろうと思つていたが、十九日の朝は期待に反し、凄じい吹雪が小さなテントを襲つていた。そこで止むなき下降となつてしまつた。

ベキーとシュペーエリはその後ちよつと好天を掴んでC5に達したが、再度の降雪によつて全員B Cに引上げたというわけである。なおエルウィン・シュナイダーは荒天続きであつたにも拘らず、この地域の精密な地図を作つたという。（吉沢）

パキスタン登山学校

M・アタ・ウラー大佐といへば、一九五三年のアメリカ隊、一九五四年のイタリー隊に加わつてK2

に行つた人として知つてゐる人も少なくないと思う。大佐はパキスタンの登山家が集つて出来ているカラコルム・クラブの代表者の資格で、昨年十月上旬から一カ月アメリカを訪問してカラコルム地方の宣伝をやり、かつ登山学校をアメリカ山岳会と共同出資でつくることに決めて来たらしい。

その構想は次のようになつてゐる。即ち、五十人から六十人のアメリカの登山家（必ずしも高所における経験を必要としな）を集め、ニューヨークからカラチまで飛行機、それからパキスタン側で設けたB Cへ行き、そこで全員が経験の有無に従つて小部隊に編成され、アタ・ウラーのような経験ある指導者または教師と土地の人夫及び案内者が供給されて、いよいよ数ある山の中の適当な高峰へ登るといふのである。

短驅で、陽灼けし、灰色のひげをつけた大佐は完全な英語で次のように語つたといふ。

「ヒマラヤは本當の山登り及び探検の最後の機会を提供してゐる。アルプスは既に早く地図にされ登られてしまつた。その岩は多くの登山靴でピカ／＼に光つており、岩面には永久的なピトンが所狭きまでギツシリと打込まれてゐる。しかしヒマラヤには不完全な地図しかなく、アルプスよりも遙かに高い未登の高峰が限りなくある。

以前には欧州やアメリカからはそこまで一ヶ月もかゝつたが、今では飛行機で僅かに三六時間の距離になつてしまつた。われわれはわれわれの国を、近接道路や補給

品の貯蔵所、土地の知識を豊富に持つた人員を用意して解放しようとしている。

エヴェレスト型の遠征には一人当り三万弗以上もかかるが、装備品をブールすることによつてこれをわれわれの夏期学校では一人当り三千弗に縮少することが出来る」と。（吉沢）

會員総会

昭和卅一年度會員総会を左記により開催致しますから万障お繰合せの上ご出席下さい
日時 四月二十一日（土）午後二時三十分
場所 神田駿河台日本体育協会会議室

マナスル隊サマ到着

植隊長以下十二名の第三次マナスル登山隊は、去る二月二日、十一日神戸港および羽田空港よりそれぞれ出発いたしました。一行はカルカッタを経て三月七日ネパールの首都カトマンズに全員集結、サード、ギャルツェン以下二十名のシェルパとポーター三百九十六名の大大キヤラバンを編成、三月十一日ベース・キャンプ地サマの部落に向つて出発致しました。三月すえベース・キャンプに到着、四月上旬からいよいよマナスル頂上を目指し登攀を開始しました。

第一回の頂上攻撃は五月中旬の予定で以後六月上旬まで前後三回の攻撃を行うことになつてゐます。

戦後最初の アムネ・マチン探検

Ⅶ

吉 沢 一 郎

翌朝、二隊からなるキャラバンは、星と月とがチカチカと光る大空のもとを五時十五分に出発して、谷から出る峠の上の石コロ道を越えて行く。反対側は恐ろしく荒涼とした土地であつた。これをチンピンニエン（裸の平原）という。

これを横断するとマライという峠（四四三〇米）、アムネ・マチン山脈を越えた峠より高いところをみると、黄河の水源はアムネ・マチンではないことになる。この峠の反対側でC18（四三七五米）。C18を八時四十五分に出発、オポのある四三七五米の峠を越える。急な下りを終るとそこに煉瓦で出来た廃墟があつた。これはその昔重要だつたホアンホーイエンと呼ばれる回教徒の要塞のあつたところである。

黄河を渡る。流れは早く且深い。胸までつかつた者もいる。流速毎秒〇・二六六米（毎時九六〇米）、オリン泊の流出口からは三〇哩、

海抜四一〇〇米。
西岸でC19、南方に鏡のようなアー・シュン・グンハ湖あり、その他にもトゥ・ロン・ラ湖等の小湖が散在している。この黄河には、長さ一・八時から二呎に及ぶ菌のない魚がいる。

五月十四日は積雪五吋、休日とする。湖岸に住むゴロク族によると、今までの地図にあるオリン湖はツァリン湖と呼ばれ、ツァリン湖はオリン湖と呼ばれている。前に紹介した中共の黄河水源踏査隊の報告にも同様のことが出ている。この辺は空の星辰のように湖が点々としてあるので、「星の国」或は「星湖の国」といわれている。

翌日西行、ワンブ・ゲンガ（ゲンガの峠地方）峠を越えて二時十五分チャカール寨（四一八〇米）につく。この辺には三百家族に及ぶゴロクが住んでいる。チャカールは湖面より三〇米高いが、一九〇四年にこゝを通つたフィルヒナは湖面の方を四二八五米と測定している。オリン湖には島が六つある。

計画通り前進することは出来るが、シナにおける政治的、軍事的情勢が悪化しているので急ぐ必要があつた。

そこで、アムネ・マチン山脈の西部を決定し、黄河の源流地帯を地図に作るために、南方踏査隊を急遽組織しなければならぬ。隊員はクラーク、ドルジェ、パオ・チャン・チン（ラジオ主任）回教徒十二名（タン・チェン・テ、馬大佐を含む）チベット人六名、ゴロク十四名。それに鞍馬三十頭。駄馬

六頭を連れて行く。
チャカール（C20）を出て湖に沿い南東へ二十哩行つたところでC21。

翌日は夜明け前に起きる。雪が四吋も積つていた。

C21を出て馬大佐の後に従い、峡谷の西端にある峠を越した。反対側はウルチドの偵察隊が「死の丘」と呼ぶ一寸寂しい場所であるが、馬大佐は、これが本当の名であるかどうかは疑つていた。西方へ一時間、それから昼頃まで南西に向う。

遂に「野性の驢馬の平原」と呼ばれる広い荒れた峡谷に達し、それから一つ峠に登つた。向う側には無数の湖が、澄んだ冷たい空気の中に、キラキラと輝いていた。

大きな流れ、即ち克蘭河（野性の馬）に達しその水を呑んでから、まづしづらに南西をさして駈けて行く。クラークは、まだ探検家の知らないクラナム湖に出たいと思つていた。ゴロクはこの湖をオリン泊に水を注ぐ「黄河」（黄河）の水源の一つと考えている。

ラツオン族に属するグンチュク族はドルジェに、この辺とツァリン泊の南には、まだまだ沢山の湖のあることを話した。オリン泊とツァリン泊の他に名前前の知れているものでは、ツルギン、クツァポアオロフチー、ランココ等の湖がある。

何時間も遡つて遂に待望のクラナム湖に達した。湖が河となるところは北東隅にあつて、幅は二五—四〇呎、深さは馬の腹位、岩床の上を急流をなして流れている。

午後半ば頃、空が突然霽れて、南西の地平線に、夥しい雪の山と、黒い尾根のある山が見えて来た。これこそ揚子江と黄河を振り分ける巴顏喀喇山脈の一部である。従つてこのクラナム湖はその山脈の北側にあるわけになる。大きな冷たい流れが、南西或は南からこの湖に入っている。附近にいるゴロクはカブラ・ラム泊といつていた。フィルヒナはこれについて言及しているが行つて見たわけではない。

ゴロクのいうところによると、オリン泊に注ぐ黄河の水源となるワンツァン泊というものが、まだずっと南西にあるという。

西及び南に當つて雪山があるが、これらはシナの地図にあるラマクオイン山、ソラマ山である。南方にある五千米許りの山はテアフ・ユパイエンコラ嶺、ラマトロハイ山と呼ばれるものである。

ゲラク族の招きにより、湖の北一哩のところにC22（四三二五米）を定める。曇つていたが夜の九時頃まで明るかつた。

翌朝ゲラク族を先頭に、小さな湖（中には直径五〇〇碼のものもある）の間を縫つてなお南方へ行く。一時間ばかりで右稍と西に向つて山に達したが、これがバインカラ山脈である。バインとは「富んだ」とか「花咲く」という蒙古語から来たものらしい。カラは「黒」。

ゴロク族のテントの真中にC23（四四四〇米）を建てる。時間が早かつたのでそれからまた北へ二時間ばかり行つてみる。クツァポまたはワンツァンジュー泊という

のを発見した。この湖水の水はバインカラ山脈から入り、出た水は南西隅からオリン泊へ流入する。オロコ河というのもオリン泊へ入つていた。

翌朝、メマモツの招きによりクラークとドルジェは、一千米もの息も詰まるような絶壁に囲まれたガラ・ボン・ゾン（酋長山の邸宅）という谷の中にあるその本営を訪れた。

族長のテントの内部は中々豪勢で、素晴らしい調度がずらりと並べてある。外国の新古の金貨が沢山あつた。

夜C23に戻り、翌日は長駆してクラナム泊の東方五哩の地点でC24、次の日、時速七〇哩の烈風にあいながら再びチャカールに戻つた。

今度はいよいよツァリン泊方面の踏査である。オリン泊から出て黄河となる所は幅四五呎くらい、急流で進め渡れないので、二百碼ばかり下流の幅二百呎の地点で渡河する。大きな金魚が跳んでいた。

雪じわのあるアムネ・コール山脈（アムナ・クラ嶺ともいう）が北東に斜めに走っている。これは今までの地図を見ると、ウグツ山脈、哈拉賽山、ブルハンブダ、マルコ・ポロ山脈、アムニ・マチン、アムネ・マチンなどとなつているものであるが、チベット人は皆アムネ・コールと呼んでいる。

チャカールの丁度真西にあたる湖岸でC25（四四八五米）。

（つづく）

鹿島槍遭難 中聞 報告

学習院山岳部

今回の冬山は個人の實力向上を第一の目標とし、鹿島槍東尾根および天狗尾根の二隊に分れ、大冷沢、大川沢合流点の小舎をベース・ハウスとし、稜線上に天幕一張出し、頂上を往復する予定であった。

天狗尾根隊行動概要

一 鈴木迪明(政経三) 小谷明(政経四) 鈴木弘二(理三) 清水善之(政経一) 藤原莊一(政経一)

昭和三十年十二月二十六日(曇時々雪) BHより荷を半分天狗池約一九〇〇米地点に荷上に往復。

二十七日(半晴) BHより天狗の鼻まで荷上げしそこに天幕建設

二十八日(降雪) 停滯。

二十九日(強風、雪、降雪量多し) 天幕を雪に埋められ除雪が追いつかず、風の通り道に張り直すこの時専大は深雪の中で天幕を撤収して行った。

三十日(強風、雪、降雪量やや少し) 食糧が残り少なくなつたので午前十時ごろ鈴木、鈴木弘、清水、藤原は下の残り半分の荷を取りに出発。小谷は天幕キーパーに残る。四名は夜になつても戻らず、ラッセルがひどく天幕に帰着出来ず下の二八〇〇米附近に設営中の他隊の天幕に入れてもらつて

いるのではないかと小谷は樂觀して就寝。

三十一日(強風、雪) 四人の帰りを待ち小谷不安のうちに一日を暮す。

一月一日(降雪とガスを通し、日輪が見える) 幾分天候はよくなつたが依然四人は帰らず、小谷は第一、第二クロアール間リッジ上に人影をみ、大声で連絡した結果下降した四人は下に設営中の他隊とも会つていないことが判明、事態の容易ならぬことを知り小谷は胸までのラッセルの中を下りしBHに到着、五時半偶然下山していった東尾根隊と会い事態を告げる。

事故発生後の捜索経過

三十日の四人の状況は次のようなものであつた。アタック天幕とデポ地点の往復に約六時間くらいは予定で出発した。当日はワカンなしで胸くらいまでのラッセルのようであつた。天幕出発時の装備は各自完全な冬山の服装で特大ザックを背負い(一名はサブザック)各自アイゼンを持ち、三十米ザイル一本懐中電灯二本、各自昼食一食を持参していた。

また一八〇〇米附近に露営中の熊本RCC、中京山岳会などからの情報は、四名はその天幕に現われておらず、二十九日天狗の鼻の天幕を撤収した四名の専大は夜の第一、第二クロアール間の尾根上でビバークし三十日夜一八〇〇米附近の専大第一キャンプ手前で一名疲労死しているとのこと、直ちに一日夜出合の昭和電工青木湖発電所取入口事務所から電話で青木湖発電所経由東京登山本部へ連絡、捜索隊の来援を仰ぎ、詳細報告のため小谷と小峰は同夜深更大町に出て東京登山本部に連絡。

二日 大町で早朝東京より先発の右川を迎え、三名で大町警察署に出頭し、また大町観光協会に報知し援助を依頼、東京登山本部の命で小谷、小峰は同夜現地に引返して明日の行動に備え、江間、石流は天狗尾根下部を捜索したが手がかりなし。

三日(快晴) 小峰、江間は天狗尾根二四〇〇米地点までの地形偵察を行う。前夜新宿をたつたOB舟橋、本間医師以下十二名の捜索隊は大町野氏、二名を連絡に残し、ガイド星野氏、同志社大学山岳部平林氏と共に現地着、発電事務所をベースに大川沢取入口小屋を連絡所とし、尾根上一九〇〇米附近に六人用天幕一張設営、前進根拠地とする。またこの日から大町警察署の多大の援助が始まる。協議の結果明日の方針として①天狗尾根より荒沢側に派生している枝尾根のうちルートを通りやすい尾根附近を二隊にわかれ捜索する②荒沢を進行する③一九〇〇米デポ推定地を掘りデポの発見につとめる。

四日(曇後降雪) 四隊にわかれ第一隊三名は天狗尾根の迷い易い尾根を調査しながら下り荒沢に達しBHへ、第二隊三名はデポ地の捜索および迷い易い尾根の調査、第三隊四名は荒沢を進行、第四隊四名は天狗鼻天幕を撤収したが、何れも何ら手懸りなし。考え得る可能性は雪崩にあつたということであつた。

五日(曇) 全員で天狗尾根筋の捜索に当る。出動人員二十五名。この結果天狗鼻直下より馬狩沢(天

狗尾根荒沢の反対、北側の沢)に落ちていた雪崩の龜裂を発見した。これは今までの降雪にもかかわらず判明出来るので余程大きいものと考えられる。この雪崩の跡は天狗鼻より下りのルートの範囲より考え十分そのルート圏内にかつていてと考えられる。なおデポは多量の積雪で発見出来ず。

六日(曇後降雪) ①馬狩沢へ二隊にわかれ、一隊は専大ビバーク地附近より他の一隊は一八〇〇米地点より谷へ下り調査、十名。②荒沢のデブリ捜索六名。本日の捜索により①の馬狩沢に關しては、二股を含めて大体それより上部三カ所に大きなデブリがあり、下端は二股で止つている。沢筋の積雪量は推定約四、五米、捜索の効果なし、馬狩沢の表面には何らの痕跡なし。③の荒沢に關しては積雪量多く掘査の結果少し。沢の中の表面的調査は効果少し。沢の中の第一クローアールからの雪崩と天狗の鼻直下の雪崩遭遇の可能性は後者の方が濃いと考えられる。すなわち荒沢に落ちた場合途中の凹状の場所では止る場合の可能性が多い。

以上の如く捜索が進むにつれて問題の焦点が次第に絞られて来た現在、事態は絶望となる。なおまた松本測候所より送られてくる山岳地帯気象通報によると天候は下り坂となつてきた。

七日(風雪強し) 天候悪化により、尾根筋、デポ推定地点を徹底的に掘しデポ発見につとめたが広い尾根と多大な積雪量によりデポ発見は出来ず。①事故の原因は雪崩

(特に馬狩沢へ天狗の鼻より落ちた雪崩)による可能性が濃くなつた。

②しかし、天候の悪化とともに沢に入ることは雪崩の危険が非常に大きく、なお、さらに沢筋の積雪の膨大な量に對し、狭い沢の中に多人数を投入して捜索を行うことはさらに非常な危険を伴う。

以上の如き捜索経過による推定と降雪による捜索活動の困難、ならびに危険により、これ以上の捜索を継続することは遺憾ながら不可能であり、春を待つて活動を再開せざるを得ない状況となつた、われわれとしても全力をつくし発見につとめたが、以上の判断により捜索は一応中止し下山と決す。

八日 BHを撤収し下山。なお今回の事故に關し陰になり日向になり御援助下さつた方々に對し末筆ながら心からお礼申し上げます。

(この稿は「鹿島槍ヶ岳遭難事件中間報告・学習院輔仁会山岳部」からの抜粋であることをお断りしておきます。編者)

会費をお納め下さい

昭和三十年度およびそれ以前の会費未納の方が大部分おられますので、会の運営上大へん支障を来しております。出来るだけ冗費をばいりてやつてはおりますが、それにも限度がありますので、会の円滑な運営をはかる上からも、会費をまだお納めになつていない方は至急ご送金下さるようお願い申し上げます。なお会費は地方会員八百円、東京、千葉、埼玉、神奈川各県在住会員は千円です。

当部の今冬の計画はあくまで個々の実力向上に重点を置いた。A班は白出沢からジャンダルム飛驒尾根の登攀を目的とし、山野井、川島、馬淵をリーダーとする五名

B班は中堅部員養成を目的とし、明神岳東稜より北穂高の縦走で、山下をリーダーとする四名。C班は春山に備え前穂北尾根の偵察に主力を注ぐ横尾班で、浅古、加々美、鯨坂をリーダーとする三名、以上三隊を編成し、各隊とも期間は二十日間以内として、B、C班は十二月十七日に出発、計画は何れも順調に進み、二十五日B班、二十八日A班、二十九日C班とそれぞれ所期の目的を達成し横尾に集結、続いて一月一日まで二次合宿を行い春に備え一日下山した。

A班報告 (ジャンダルム飛驒尾根の登攀)
昭和三十年十二月十八日夜行で東京駅出発。
十九日(晴) 高山、神岡、栃尾を経て夕刻中尾部落着。
二十日(晴) 中尾より白出沢に入

ジャンダルム飛驒尾根

立大山岳部

りに飛驒尾根の取つき地点まで偵察を行い、ルートの観察を行つて前進キャンプに帰る。BCには川島、八木が待機し登攀態勢はととのつた。

二十四日(晴) 登攀隊山野井、馬淵の二名三時半前進キャンプを出発、ライトの光を頼りに横断地点で雪と荷の関係からザイルを結んだ。飛驒尾根の主稜は近づくと共に頭上を圧し、夜が明けると共に

風が生じて来た。直下の壁も苦し二ビッチで解決しリッジに出ればジャンダルムは蒼空に高く、白出沢はますます深い。T2への登りが悪くみえるのでT3下より横断、右のT2側稜(b稜)へ逃るが、これまた困難、苦しい二ビッチにハーケン四本を使い十一時T2に達する。軽い食事の後勝手知つた夏道を快適に連続登攀で進み十二時半ジャンダルムの頭に立つ

た。日は暖く、視界は果しない。大休止の後ロバの耳を通過しザイルを解き奥穂を経て穂高小屋に達すれば思いがけずB班の応援を受け、雪洞泊りの予定を変更し、B班の四人用天幕に泊らせてもらうことにした。一方この日川島、平井、八木のBC隊は白出沢を登つて穂高小屋に来てみると、小屋へ万に備えて荷上げして置いた食糧と石油一罐が全部紛失している

何と訓み何と発音したかを知ろうともせず、現在それをせつどうと呼び聞き且つ読んで何の疑念も不合理感も抱かぬ。たとえは岳人九三三(昭和三十一年一月三二頁所載伊達忠雄「雪穴物語」かくて雪洞第一号は誕生)および堀本徳次郎「雪洞について」は雪洞(雪穴)の史前期から近代の発祥発展へと述べて構築技術を要領よく説明し文献もあげてあるので好箇の読物であるが、雪洞の用語起源、その訓み方発音については一切触れていない。この方面の文献を渉猟研究した筆者ではな

のを発見した。心ない登山者の行動を怒つたが、致し方なく、十一時雪崩を恐れながらBCに戻る。二十五日(吹雪後晴) B班の好意で暖い夜を過ごし、吹雪の中を強引に出発、北穂に向う。新雪に慎重なバランスを要求されながら九時北穂登頂、帰途沢沢途中でB班や東大のパーティと会い健闘を祈り十時半白出沢を下り始める。上部は固く凍つていた雪も下るに従い遂に腰まで没する。白出大滝下でスピンドルの前進天幕を撤収してきた川島達と会い共にBCへ下る。夜は飛驒尾根登攀成功を祝してささやかながらコンパを開き、他班の行動と照合の上、天狗岩および奥穂高山稜などの計画を打ち切り上高地入りと決める。

二十六日(吹雪) BCを撤収中尾部落に下る。
二十七日(吹雪) 中尾峠をこえて上高地に入る。
二十八日(曇) 上高地より横尾に入り、A班を解散、二次合宿に移り一月一日下山する。(山野井武夫)

いが、少くとも一流登山家の集るJACルームでこれが討論の種になつた例はないようである。ところで上記辞苑の記載に待つまでもなく、一般社会人の常識として雪洞の訓は「ぼんぼり」であり入学試験や入社テストでの普通の答も「ぼんぼり」である。だから「その夜の雪洞生活は女性数名をも混えて華やかな、予想外暖かいものであった」などと紀行に書けば、粗忽者は歌舞伎調のステージでのナイトクラブのことかと思ひやしないでもない。尤も雪洞は案外

りと言ひ通しても却つてユーモアがあつていゝかも知れない。しかし本来の雪洞は厳寒な雪中経営手段なのである。
所で小文の結論であるが、一度誤伝された山名を正名に戻すのがむづかしいように、いわゆる完成された雪洞までは雪穴という一般的な、間違ひの少ない言葉に直すのはもう手後れかも知れないが、登山界の良識に訴えて敢てこゝに用語の転換を提言する。

雪洞は或いはゆきぼらで始まつたかも知れない。または雪洞(雪穴)と当分の間括弧をつけて記載するつもりだつたかも知れない。または雪の洞穴の意味から簡単浅薄にも雪洞と字を詰めたのかも知れない。仮に雪洞が近代用語として登山では「ぼんぼり」または「せつ」と違ふ意味異なる発音で使えなくともそれは日本化された上代支那語であり、言葉よりも寧ろ文字であり見るための要素の多い術語である。そこで筆者は最も日本語的なもの即ちゆき・あなを二つを結合した雪穴を正しい登山用語兼一般通有語としたいのである。或問す穴とは簡単で天井のないものの感じが強からずやといわれるなら、もう一度字引を御覧下さい、あなはくぼんだ所という意味と共に上づつた。狐穴、熊の棲家の穴、皆洞穴である。上のあいてるのはくぼまたはみぞである。また実際近代的の雪穴にはせいぜいシート張りや雪の実質天井を欠くものもある、結局ゆきあなという総称で充分である。本篇に対しての紙上討論を活潑にしたい(沼井)

雪洞ということば

近頃、手許にある辞苑(新村出編纂、博文館昭和十二年百四十二版発行)を繰つてみると、濁らずにせつとうと撥ねて発音する雪洞は「(一) 木竹の框に白紙を貼り一部に窓をあけ茶炉の上を被ふに用いるもの、(二) ぼんぼり」とあつて説明図がついている。そしてぼんぼりという項を引いてみると、「(一) 中啓の一、上方の開きが少ないもの、(二) みみはらい、(三) 紙張りのおほひある手

燭(雪洞)、(四) 行灯の一種(説明図あり)、(五) 茶炉などに用いる紙張りのおほい、(六) 鯛・鱈・海老等の肉を湯煎にしてほくし、更に固めて煮出汁をかけた料理品」とある。

しかるに昭和年代わが国の積雪期登山における幕営法の一つに意識的に採用されるようになってから雪洞という文字は登山記録に多く見られるに至り、最近には積雪期における長期長途縦走または極地法登山では雪洞は必須の手段でありまた言葉であるようになった。そして我々はその初めの用語者が

明い感じにも出来るのでぼんぼ

穂高岳の早期

登山者 (四)

山崎 安治

五、鶴殿正雄氏の初縦走

穂高岳の開拓者として、鶴殿正雄氏の残された業績は素晴しいものではない。しかしまたこれほど世に知られていないものも少いように思われる。赤石山脈、木曾山脈その他上信四阿山など同氏は多くのエネルギーな紀行(23)を初期の山岳誌上に発表されているが、その最も力を注がれたものは何といつても穂高岳の開拓であつた。明治四十二年(一九〇九年)八月になされた前穂、奥穂、槍の初縦走、ならびに大正元年(一九一二年)八月、岳川谷から天狗沢を登り、天狗の谷より奥穂高および西穂高への初縦走は飛騨山脈における探検的登山史上の黄金時代を飾るにふさわしい堂々たる金字塔として、永久に残されているのである。

明治四十二年夏、鶴殿氏は木曾駒に遊んだのち上高地を訪れた。八月十二日である。

「信飛の国界に方りて御岳、乗鞍、穂高、槍の四番岳のあることは何人も首肯するところ、だが穂、槍間にはなお一万尺以上の高峰が沢山群立しているということを知っている者は稀である。で折もあらばこの神祕の霊域を探検して世に紹介しよう」と

思うていた。」

とその縦走記(24)の冒頭に示されている。上高地温泉に折よく居合せた中房の獺師横沢類蔵にこの縦走の相談をするとは彼は通れないといつて案内を断つたそうである。当時において如何にこの縦走が困難なものであるかを物語っている。結局嘉門次を案内に頼み、同行者は鶴殿氏のほか四名、前穂高岳の登山だけで下山する予定のその四名のために案内を一名(名前は記されていない)備一行は六名となつた。八月十五日明神池畔の嘉門次小舎に立寄り五時四十分出発、小舎より五、六町碎川を登つて左に折れいまの上宮川谷に入る。

「登るに従い小谷が幾条にも分れる。氣をつけていぬとわからぬ程浅い。が最初の鞍部に出るまでは右へ右へと取つて行けば道を誤ることはあるまい。この鞍部の前面は小柴が密生している。山麓では緑色の毛氈を敷いたように見えるからよく方位を見定めておくといふ。海拔約二千米突以上は雑木次第に減じ、ミヤマカンバ、ミヤマハンノキ、ミヤマナカマド等の粗く生えたる土地、ここを抜けると上宮川原(信濃上宮川原、嘉門次)左の方数町には南穂高の南東隅に当る緑色の絶壁、此川原を斜め右方に進みベニハナイチゴ、ミヤマナカマド、ミヤマカンバの小柴を踏み午前八時には前記の鞍部高き約二千二百六十米突」と

とあり上宮川谷より東稜の鞍部に立つたことが明らかである。

「ここに長さ十間幅四間深さ三尺許の小池がある。中程がくびれて瓢形をなしているから瓢簞池と云をう。池の周りのツガザクラ、樺松は濃き緑を水面に浮べている」

とある通り、この時この小池に名称が附され、これが現在も通用している。ここより暫く尾根を登り東北に回つて信濃又四郎谷(現在の又白谷)に下り「斑岩の大岩小岩が筍木を乱したように崩れかかっている急坂」を落石をさけながら横隊になつて登り、上部で四岐する向つて左から二番目の谷をつめ前穂、明神間の鞍部に出た。瓢簞池の鞍部から下又白谷へトラパスし前穂、明神間の鞍部に登つたことはこの紀行に附された五万分の一の地図及びスケッチ(25)でも明白である。時に午前十時五十分。「急遽右に折れ、三角点目標に登る。このあたり傾斜緩く、岩石の動揺が少いので比較的容易だ」とあるのはウェストンの「岩は私達が今まで出逢つたどれよりも峻しく固いものだった。それで私達は全力を注がなければならなかつた」と述べているのと大分おむむきを異にしている。十一時十五分一等三角点に攀じ最高峰の南に位するの南穂高と命名する。ここで岳川より登つて来た米人フイシャー氏と合流、同氏は鶴殿氏の計画を聞きそれと同行するため嘉与吉を案内にやつて来たのである。前穂より引返す同行者四名と別れ正午嘉門次父子を先峰に鶴殿、フイシャーの四名は「陸地測量部員の他前人未踏の奥穂高」を目標とした。午後二時四十分奥穂高

頂上着。

「頂上の広さ十数歩、すべてギザギザした石塊、常念峰のような円形のものは一つもない。東隅には方二寸五分、高さ二尺の測量杭がたつた一本。(中略)海拔約三千百十米突、従来最高峰と認められていた南穂高を凌ぐ事実一百余米突、群峰の中央に聖座しているから榎谷氏のいわれた奥穂高が至当だろう」

二時三十分北に向つて下りはじめたが、濃霧のため飛騨側へ踏み迷つたので再び頂上に引返し、尾根伝いに、いまの穂高小屋の鞍部に下り、さらにいまの沢沢岳(鶴殿氏は北穂高と命名)に四時十分到着する。東側の急崖を下らねばならず、加えて風雨がはげしくなつたので鞍部に戻り、野営地を求めて山腹をななめに東へ下り沢沢岩小舎として後に有名になつた「空沢の石窟」を発見して一泊した。午後五時である。岩小舎についてはこう書かれている。

「十三丁も下つたと思うころ方三間、高さ一間余の大理石の下、少々空虚あるを見出す。幸い近くには樺松、半丁余で水も得られる。かゝる好都合の処はないとて嘉与吉と二人で其下の小石を取り除けて左右に積み、風防けとして居を平に均す。フ氏と嘉門次は樺松の枝をとりて火を点ける(中略)この石窟は穂高の同胞で取り囲まれ、東方は稍低下しているのちようど少し傾斜した大楯鉢の中心にあるようだから風は当らない。その上絶えず焚く焔で石の天様は暖まり、南方に大残雪を控えている

にもかかわらず至極暖かだ」

これからみると嘉門次もこの岩小舎はこの時はじめて発見したようである。この谷を横尾の空沢、または大沢、眼前にそびえるいまの前穂北尾根を屏風岩、または千人岩(宛字)いまの沢沢槍を剣ヶ峯として紹介しており、またフ氏はこの石窟を「カレタニのユワゴヤ」として述べている(26)。

翌十六日午前六時岩小舎出発、七時いまだ沢沢、北穂間の最低鞍部に着き、八時北穂高に立ちこころを東穂高と命名した。

「南方数十歩には天工の鉞で削つたような極めて堅致の巨岩が底知れずの深淵から何百尺だかわからなく屹立している。猪や羚羊も恐れて近かねば岩燕や雷鳥でも躊躇するだろう。今眼前し尺にこの偉傑に接した自分は一種の魔力に魅せられてか覚えあつた」と

「いま我等のいる前後数町の間は曾て測量部員すら逡巡して通行しなかつたところ、案内者も今回が初対面、岩角に縋り、綱を手繰り、または樺松を握りなどし辛くも山稜の最低鞍部、槍と穂高の交差点についた」

26

槍ヶ岳及び穂高山間の山稜横断記 ガレン・フィシャー、小島鳥水訳（山岳第五年第一号）

25 24

前出5
前出5に大天井と槍ヶ岳の頂上から望んだ二葉の穂高山のスケッチがあり、点線で登路が示されている。何れも加山竜之助氏の写真によるものとされているが、大天井から望んだスケッチの点線には明らかに明神東稜より下又白谷にトラバースしたことがうかがわれる。

23

注および文献

鶴殿氏は初期の山岳誌上に次のようなものを発表されている
◇四阿山にのぼる記（第六年第二号）◇地蔵岳鳳凰山（第七年第一号）◇鋸岳縦走記（第九年第一号）◇木曾駒（大原方面より）（第五年第三号）
◇立山と劔岳に就いて（第十六年第一号）など。同氏は当時信州小諸に住み、小林区署（今の宮林署）に勤められていたそうである。（沼井氏の御教示による）

登山の記録 ② というもの

沼井鉄太郎

しかしもしまた南極大陸などにかゝる初登が殆ど全部、つまり登山技術上の困難と肉体的消耗を省略するために空輸による山頂着陸が行われたら、それはどう記録するべきであらうか。正当な理念をもつてすればそれは寧ろ探検史上の最初の到達とするべきものとは考へるが、また広義登山史上の特例として「初登、但し空輸着陸による」と但し書付で肉体的初登と肩を列べてもさして批難的とはならないかも知れない。

本題にかゝつて山の初登というのは雪線以上の高山なら世界を通じ大方分明であるが、雪線以下植物帯最上限の地衣帯草本帯以下の山では、記録された初登が果して真の人類初登であつたか否かは疑問となしなればならないものが多い。たとへば日本の山である。わが国近代登山の黎明期に始めて世に知られた日本北アルプスの槍ヶ岳は播隆上人の事蹟考証によつて江戸時代既に登られたものと信ぜられるし、また劔岳に陸測部員が発見した際に仏道用具の破片が発見されて初登またはその後の登高の事実を裏付ける証拠品となつたのは有名である。穂高連峰は古来山地民の猟道にもなり得なかつ

たとも考えられず、少くとも嘉門治一派はウェストン師や小島先輩などの以前に夏も春の積雪時でも大いなる峰頭はその最尖端でなくとも通過していたであらう。勝道上人の開拓によつて知られる日光諸山とても類型推測が可能である。またかつてわが属領地だった台湾の高山も殆ど大部分は高砂族（蕃人）の狩猟路の内の諸峰に過ぎなかつたやうで、ただ三面削立して狭いその稜角上に獣の棲息し得ない大断崖の如きピークのみが昭和二年まで人類初登を許さなかつたものであると考へられた。内地では北アルプスの小槍、南アルプスの鳳凰山の地蔵仏のような副峯的または山上岩塊の岩峰の初登だけは近代でのものに違いないらしい。結局本邦では山岳が探検やスポーツ登山の対象たるよりずっと以前に民族の生活圏内のものでなつて、殆ど例外なしに初登が特別の史実として残らなかつた程の技術上安易な山だったともいえるのである。

そこで筆者は明確な記録はないが以前既に登頂されたと考えられる山の最初の記録の初登に文化史的初登の名称を用いて台湾登山小史を編纂し「山岳」に発表したことがあつた。今度の近代日本登山史抄にもその筆法を用いてある。この用語は決して最良のものではなく、或いは記録初登、記録的初登または記録上最初の登頂（Recorded first ascent）或いは確認初登（Authorized first ascent）記録、公認初登（Official record of first ascent）などとする方がよいかも知れない。そして従来特にスポーツ登山家の編纂した登山史的記述においては、真の初登か文化史的初登かの点を曖昧どころか兎角一方的にスポーツ登山界のみに固めて得々然たる傾向が強かつたのは、科学性を尊重するべき史学的文献として潜越でもあり独善的過ぎる身の場合未だ止むを得ずその愚に從つて一人であることは申訳ない。

初登に次いで同じルートまたは他の新ルートによる第二登頂があり、もし後者の新ルートによるものならば、それは同時にまた新登頂または登路変更初登となる。およそ山という立体は少くとも薄い本を立てたやうな二面体でありこの際主稜は最高点を境としてただ二つである。しかし地球上には三角錐または四角錐を基本とする立体の山が最も多くある。従つて稜（尾根）のみに関しても新登頂初登稜は往復形式による初登を除いて少くとも一つまたは二つまたは三つあつてもよい。これに面（壁）または溝（ルンゼ、沢または谷）がルートに加わると各々三乃至六或いは四乃至八と標式的に増加することになる。

また山頂から逆に未知ルートの稜または面または溝を下降するのは一種の登路変更（実は降路変更）であつて、各々の新しい稜・面・溝に対し初降または第一下降又は第一次下降（first descent）場合によつて、記録上の第一下降（Recorded first descent）という語を使つてもよい。そしてその下降が初登高に先じたものであれば、上下を通じて初通過）とでも註釈を入れる。

ここに興味深い実例がある。即ちかのジャーナリストチックに有名だつた大正中期の槍ヶ岳尾根の初登攀争いである。北鎌を独立峰とせず槍の一つの長大な稜と考へれば、早大のパーティは第一下降兼往復であり、学習院パーティは第一次登路変更文化史的初登攀（独標以来をも含めて）であつて別に争ひといわれる筋合のものではない。ただし独標を独立峰としていづれが文化史的初登または（実は陸測隊に次いで第二または第三実かも知れない）ということになると、早大がわざわざ先に記したということになるのである。要するに主目標とその到達終局点が違ふための二つの一致しない主張であつて、記録にして正しく忠実な限り、登高にむきの登山的というのであるが、または局部的危険の下降を含む踏査を主とする探検的というところであるかの客観的違いであつて、實際上には両者にひとしく登山記録上の高い地位を与えて然るべきものと思う。因みにこの北鎌尾根は筆者も当時計画したが他地域計画の遂行と機がつかつたためついに手をつけた機会を逸したためであつた。そういう人は外にもあつたであらうと推察される。（未完）



会 員 通 信

マナスル登山隊を送る

冠 松次郎

第三次マナスル登山の途につかれた隊員の方々の健康と成功を深く祈念します。

日本アルプスの黎明期を明治四十年前後とすれば、ヒマラヤの黎明期は一九五〇年を中心としてその光りを強めたという感じがあります。エヴェレスト、ナンガパルバット、K2、カンチエンジュンバ等が次々に登頂されたといえ地球に最大最高の高層建築であるヒマラヤは今後恐らく永久に亘つて自然の手他にこれを変えることは不可能だと思えます。従つて第一次エヴェレスト登頂、第二次エヴェレスト登頂も、何等自然界に変更を来さなまいと思ふもので、一番乗、二番乗の快味と功名もさることながら、私たちが登山家は、そのヒマラヤを楽しましとい。登山の遊戯三昧の聖地(広義のスポーツの最も高潮された心境をいう)としたい。名漢は水力電氣によつて蚕食され、美しい高原は渾水池に化せられんとしているわが国の山水に比べれば、ヒマラヤは実に天恵のオアシスであるといえる。

さて第一次、第二次に次ぎ第三

次マナスル登山が決行されると、私たち日本の登山人は、今度こそどうか成功してまいりたいという熱意で一杯であります。今回は外国の登山に幾多の経験をもたれた隊員を隊長として、皆すぐれた隊員ぞろいなので、私たちの囑望もまた強いといえます。

これは余事でありませんが、私の経験では、六十才から六十五才位を登山の限界とし、それからは、道のない悪い山登りや谷渉り、冬の高山登攀などは容易でないと感じました。まことに残念ですがやむを得ません。横さんは今年六十一になられたという。丁度その限界に近づいておられますので、ヒマラヤの登山は一大奮発だと思えます。恐らく氏としても一期の思い出になられることと察します。さういう意味からも、どうか第三次マナスルでは成功を収めて欲しいと深く念じます。

伊勢の高見峠越え

古 沢 肇

暮から正月の休みに、伊勢の松坂から紀州(伊勢)街道を橿田川に沿うてさかのぼり、高見峠を越えて正和へ出た。もともと本当に歩いたのは伊勢側の波瀬から峠を越えて大和の高見村杉谷までの間で、あとは乗合の窓から眺めて通り過ぎた、いわばキセルの徒歩旅行である。

昔皇女和宮も泊られたという建物は小作りではあるが立派で少しも傷んでおらず、越後の浅見に残る本陣のような風雪に朽ちた佇むしさは見られない。

こゝから峠を越して大和まで旧道を敬遠して、もう直きバスが全通するばかりだといつた自動車道路をのろろ歩いて行つたので相当に時間をつぶしてしまつた。その代り冬枯の景色を見るにはよく、大和の方から吹き越してくる風が膚を刺すように冷たかつた。峠の上には県立公園香肌峡という標柱が立つていて、頭上に仰がれる高見山(一二四九米)の宣戸の斜面が美しい。大和へ下つて、この街道の大和側の宿駅、驚家泊つたが、村の家並の半分が近年火災で焼失したため、もう昔の面影はなかつた。本陣の建物もなく、かつて紀州の殿様も泊つたという古い旅館屋が一軒だけ、上段の間を持て余し気味に残つてゐるだけだ。そして伊勢と大和とはこんなにも気温が違ふかと、おどろくほど寒さが厳しかつた。

この高見峠は、山日記の本邦主要峠高度表には出ていない。山日記掲載の表は高度千メートルで切つてゐるから著名な峠で洩れているのが多い。この附近では吉野川と北山川の分水嶺である伯母ヶ峯峠がそうである。このことは同じ日記の主要山岳高度表が千五百メートルで切つたため中国山脈が全部消えているのと同様、一寸心残りのような気がしないでもない。限られたスペースであるから山の方は止むを得ないとして峠の場合はどんなものか、峠、高きがゆえに尊からず、といたたいような気もする。

図書紹介

エヴェレスト

—その人間の記録—

W・ノイス著
浦松佐美太郎訳

歴史的な一九五三年のエヴェレスト登山を外からききわめて整然と正確に眺める機会を世界の読者に与えてくれた本であるとするならばノイスの「エヴェレスト」はその同じ登山を登攀隊の内部から覗かせてくれる本といえないだろうか。「サウスコル」の副題に「一人の人間のエヴェレスト登攀の体験」とあるのを訳者は表記のように変えたのだと「あとがき」に書いているが、数多いヒマラヤの山の本の中でも、このくらゐ一登山者の人間の体験が詳細にかつ飾り気なく語られてゐるものは少ないだろう。それが歴史的なエヴェレストの登頂を舞台として語られてゐるのだから、この本が登山家だけにではなく広い一般読者に深い感銘を与えるのは当然であらう。

著者は文学者であるだけに鋭い感覚をもつてエヴェレストを凝視している。「二つのエヴェレスト」(三六六頁)などもその一つで彼にはエヴェレストはいつも岩と雪と氷から成る非常な存在であり「静かな捕えることもできない大きな山だつた」。そのエヴェレストが登頂後は「世評の焰の中に消されて」ゆき「そして第二の異つたエヴェレストが現われ始めたのである」といつてゐる。

エヴェレストには人格などというものは無い。そんな馬鹿げたものはエヴェレストとは何の関係もないだらう。断崖にもコルにも、今は人間には耐え切れぬような風が吹き荒れてゐるだろう。この小さな夏の登山がエベレストにだけの変化を与えたらうかということには同意して貰へると思うとも下山の途中で書いてゐる。

この第二のエヴェレストが問題であつて「山のことを何も知らない人たちが、既に登られてしまつた山について「征服」を論じている」と登頂後の馬鹿騒ぎに彼らしい批判を下してゐる。実際カトマンズまでのお祭騒ぎにはうんざりさせられるものがあったことがよく判る。このあたりはテンジンの「ヒマラヤの男」(白水社刊)と対照すると興味がある。

著者はテンジンについてもなかなか鋭いかつ正当な観察を下してゐる。二度目に酸素なしでサウスコルに登つた時、彼はシエルパのブウ・ドルジをコルの手前で参つてしまつたアン・ドルジを連れて下山させたが、立派にコルに登れる力がありながらよく隊員の命令を守つたこの職務に忠実なシエルパを彼は賞讃しテンジンと比較してゐるくだり(三〇三頁)なども興味深いものがある。

訳者も書いてゐるように彼が二万数千フィートの氷河上のテントの中でも手袋をはめながら彼の日記を書き続けたという努力には頭を下げざるを得ないし、またそのためにこそこの本が、従来山の本には求められなかつた独自の面白さと迫力をもち、そして世界の登山者が何よりも知りたがつてゐたいろんな問題に明確な回答を与えることができたのであらう。

(渡辺公平)
B6版 三九〇頁 写真二十四
頁 三九〇円 文芸春秋新社

ガイドを借り

て登った山

— ユングフラウと
ケンブリッジ —

日高信六郎

はじめの山は深い印象をきざんで、それにまつわる思い出とともに、いつまでも脳裡にのこる。九州に育つて雪の山を知らなかつた私のようなものが、最初に接した晩秋の白峯三山のすがたは眼底から消しがたいが、それにも増してはじめて氷河をふんで登つたユングフラウは何としても忘れられない。

はじめてゼンバで国際連盟の總會が開かれたのは一九二〇年の秋だから、ずい分昔のことだ。日本からついたばかりの私はその日本代表部で働いていた。

レマン湖畔はすでに木の葉おちつくして寒くわびしがつたが、湖をへだてて、臥牛のようなサレーグのかたな遙にそびえるモンブラ連峰の夕映えを眺めるのは、こころ暖まる思いであつた。とうとう我慢し切れなくなつて、やつと三日のひまをひねり出し、同僚の三谷君（いまの待従長）と二人で停車場にかまつけたのは翌年元旦の朝まだき、外灯こそあかあかと照らしているが、町には人かげもない。

はじめはインターレーケンから少しはいって、雪の山に初見参し

て来るつもりだつたのが、当時まだ在世中の辻村伊助さんの思出がからむトウー湖やインターレーケンを過ぎて、ラウターブルネンの谷に入り、ミュレンから深い谷のむこうにアイガー、メンヒ、とつとつユングフラウ三山が西日をうけて輝きやがて夕映えにてりわたるのを見てはもうやり切れず、おまけに登山電車はお客が三人あれば今でも動くと思ひてはなお更らること、せめて電車の終点まで登つて見ようと思ひ立つた。そこで急に山靴などを仕入れ、翌朝ウエンゲンからガイド一人つれて電車に乗り込んだ。前日におとぬ上天気、車内は英人のスキーヤーでごつたがえし。新雪が深くてクライネシャイデックで降りされ、トンネルの入口まで歩かされる。元気のいい三人ずれの若者はケンブリッジの学生で、明日ユングフラウに登るとウエンゲンの名ガイド、シュネッゲルをつれている。話すうちに、ヨッホから四時間あれば頂上に行けると聞いてムラムラと謀反気が出る。学生も共鳴して今日ならガイドを貸してやろうとの申し出にたちまち登頂の話がきまつた。

ヨッホにつくと景色を眺めるのももどかしく、借りもののピッケルを握り二人のガイドにつながれて雪原に下り立つ、すでに二時間を過ぎ陽はユングフラウのむこうに傾いている。雪原をわたるベルグシュルンドを乗り越えてロッツァーザッテルに登りつた時は五時をまわつて陽はすでに没し、頂上に続く雪稜はすつかり凍つていて、生れて始めて氷の上をアイゼンもつけずに登る二人は、危なげな足つきでガイドの切るステップをふみながら引つぱり上げられるが、なかなかかどらないうちに時間はどんどん進む。とうとう頂上わずかで退却と決心したのは六時半ころであつた。下りはだいぶ苦るしんだがなれたガイドと、おどろく程明るい星明りに導かれ、ランタンもつけず小舎に近づく頃霧がまいて来て、九時半頃降りつくとももなく雪になつた。暖い小舎に入ると、学生達は床をふみ鳴らして迎えてくれた。彼等はズツと望遠鏡をのぞいていたと聞いて、ベルグシュルンドを越える時足をふみ外してガイドから宙づるしにされた三谷君はくびをすくめる。その頃の小舎は何の設備もなく、お客は板の間に藁蒲団を並べ毛布をかぶつて寝るのであつた。

夜半から吹雪になり翌朝は一足も外に出られない。学生達はこれで二度目の失敗だと舌打ちしながらも、来年また来るさと朗である。下でも盛に降つていて電車は動かない。雪だらけになつてクライネシャイデックのレストランに入ると、噂は伝つていて、居合わせた英人たちが一斉に立ち上つて喝采し、鹿瓜らしいお爺さんや元気な若い連中が寄りたかつて肩をたたく、前日の上首尾を祝つてくれた。こゝで暫くスキーを楽しむという学生たちと別れたが、一番若いのが君たちはいつケンブリッジに帰るのだいとすつかり同窓生扱いにして、私たちが東邦の役人だと聞いて腑に落ちぬ顔をしたのは面白かつた。

屋外にむらがるスキーヤーの仲間から一人の老人がぬけ出して「僕ははそくから歩くことにきめたよ」と笑いながら雪だらけになつた服をはたき、はずしたスキーを担いでわれわれの道すれになつた。おかげで、美しい縦の木立をぬつてウエンゲンまで降る五哩の間のいい話し相手が出来て退屈しなかつた。

その日の夜半ゼンバに帰りつき、このあわただしく急ぎつた山旅を終つた。

山日記使用の一例

佐藤 一栄

第十回国体登山の新潟県予選は夏の白馬岳連華温泉を根拠地として三日間にわたつて行われた。参加者は高校一次予選の通過者十七名を含む六十六名、県民体育祭をも兼ねた行事なので、国体予選と隊を二分する盛況であつた。

今回の国体予選も、山日記の利用価値を認識させ、あわせて選考の適正を期す意味から予選必携品に指定し、その利用法についての講習を行つてかなりの効果を挙げ得た。

ここに山日記使用の一例としてそれを中心にした報告をする。

▼山日記を常に携行し記入する習慣を植付ける趣意で、集合から解散までの山日記の記入を命じた。連華温泉の夜には時間記録のと

り方、行動中の樹相、岩石の変化休憩中の地形、地物の観察、頂上の展望図の作製などについて記入の要領を教えた。

▼筆記試験の答案用紙にした。あらかじめ用意した問題のプリントを配布して、その答案を山日記に書かせた。従つて山日記を辞書にするもよし、常に熟読している者には容易に解ける問題も幾つか挟んだ。そのため山日記を常々こなし持っている者、火の粉を払うようにあわてた者との書き振りは直ぐ判別できて甚だ興味深いものがあつた。

最後に山日記を提出させ選考委員が一冊毎に採点して、翌朝各自に返却した。

▼実施に当つて、その他日記帳という形式の山日記であるために、或いは個人生活まで覗く恰好になりはせぬかと懸念したのであつたが、実際は案じた程のこともなく、むしろ大半の記事欄は白紙の儘の状態であつた。たのものである。というのは本年度の山日記に限らず、以前のもので自由に使ふことを許しておいたからであつた。

会務報告

一月役員総会 十一日(水)

場所 本会図書室

出席者 日高、松方副会長、理事入沢、成瀬、渡辺、交野、干谷、金坂、外山、大塚、村木、折井、今村、委員山崎、評議員沼井、神谷、岩永、村井、監事石原

一、南極観測隊の件 学術会議茅会長よりさき頃副隊長を推せんされたいとの申入れがあつたが(十二月十四日役員会既報)その後別宮会長と永田隊長、宮地氏(天文台)と話し合いの結果西堀評議員を推せん、一月十一日の委員会において正式に副隊長候補として決定した。なお西堀氏より別宮会長にJACを中心として設営に関する委員会を作つてほしいと申入れがあつた

(松方)
二、第三次マナスル登山隊先遣隊帰国歓迎会ならびに本隊壮行会は一月十四日午後五時から休協会議室で行うことに決定。

(入沢)
三、本会津軽書記は旧ろう病気のため辞任の申出あり、事務の都合上、臨時事務員として佐藤範子氏を雇済することに決定。

(入沢)

追記 ①鹿島槍犬尾根における学習院大学山岳部の遭難について松方副会長より詳細報告あり、②穂高奥又白谷における登高会の遭難につき本会よりの見舞を信濃支部長に依頼、同支部

より会員百瀬孝、青柳安昭、大木保太郎三氏を現場に派遣した
二月役員総会 八日(水)

場所 本会図書室

出席者 別宮会長、松方副会長、理事入沢、成瀬、沼倉、交野、今村、外山、折井、委員初見、山崎、評議員沼井、神谷、岩永村井、監事石原

議事ならびに報告

一、秩父宮記念スポーツ会館(仮称)建設募金の件 昨年十二月役員総会で報告した右募金につき一月二十六日体協より正式に六十万円以上、募金達成目標期日本六月二十五日(故殿下ご誕生日)というこで依頼あり、当時体協での会議席上入沢理事より「本会は五十周年記念事業ならびにマナスル登山募金などのため目下のところこれ以上の募金は困難」との旨申入れてあるが、もち論協力は惜しまないが、なお一応本会の事情を入沢理事より体協に説明して諒解を求める。

(入沢)
右募金に関してはたんに寄附金を受けるより、例えば山岳に関する図書交換会、映画会などの企画を考えたい。

(松方)
二、支部設置方針の件 支部設置の意向を持つ地方があるが、具体的に話合を進めること。

三、五輪選手派遣基金募集の件 体協よりの依頼で右基金募集のため東和映画会社提供の映画若い河の特別有料試写会会員券の割当てがあつたが、沼倉理事が引受けて処理した。

四、飯能山岳会講演の件 一月十五日同会の依頼により山田理

事がマナスル登山について講演した。
五、終身会員取扱の件 沼井評議員より提示された案により今後検討することにする。

六、月例会計報告(沼倉)

二月臨時役員総会 二十七日(月)

場所 本会図書室

出席者、別宮会長、日高副会長、理事、入沢、成瀬、沼倉、渡辺、外山、今村、折井、村山、山田、評議員、岩永、藤木、村井、監事、石原、委員初見、山崎、太田、ヒマラヤ後援会古市

議事
一、第三次マナスル登山の募金

に関する緊急協議の件
募金状況説明

財界一般は新生活運動の余波を受け、また募金も三回目という悪条件で思ふ様に成績が上らず、現在二千二百万円程度である。必要経費は事務費等を含めて、三千三百万円を計上している。資金的には苦況の立場にある。時期的に募金はマナスル頂上アタックの五月下旬までであり、その期を逸しては募金も益々困難となる。従つて不足額を賄う方法として競輪を利用する募金を試案として提出する。方法としては、先般大阪で実施されたオリンピック特別競輪というような企画で、マナスル登山募金のためにも川崎または後楽園などで二日程、特別に競輪を開催すれば二千万円程度は釐出可能と思う。これに対する山岳会としての可否を協議して貰いたい。

(古市)

山岳会の立場として競輪の上りからの寄附を受けることは反対で

ある。ヒマラヤ登山のための募金に手段方法を選ばぬという態度には賛成しかねる。

(岩永)
オリンピック特別競輪の開催については反対の意志を言明してあるのにマナスル登山募金を看板としての競輪開催の企画は前言と矛盾するので反対である。

(入沢)
競輪から上る寄附金でマナスル登山と云うのは勿論好ましくない。募金担当の事務局の見透しはどうしても未だ一千二百万円内外不足するというので、他に適当な募金方法がなければこの際は止むを得ないと思う。

(日高)
競輪開催の企画については必ずしも実施出来るといふ段階ではない。なお毎日新聞社としての態度も目下、本団社長不在のため未決定であるが山岳会としての可否を先に承知して置きたい。

(古市)
競輪そのものが好ましいものでなく、私見として競輪の寺銭によつて地方自治体が運営費、経常費等を賄うことは良くないことだと思つてゐる。募金担当責任者の早川種三氏や古市さんなどの並々な努力の現状を伺つて見ると、本意ではないが貰えるものなら貰つてよいのではないか。募金が思わしくないから止むを得ず貰うということになったら如何。

(日高)
万止むを得ず競輪開催に依る募金を実施せざるを得ないならば①これを募金の前例としないこと。

②体協の諒解を得ること。③ヒマラヤ後援会としての意旨も検討する事。④毎日新聞社本団社長の意旨を質すことにしたい。

(別宮)

小集会

第一六九回 一月十九日(木)

場所 体協会議室

「マナスル先遣隊報告」

小原勝郎氏

第七〇回 二月六日(月)

場所 体協会議室

「第三次マナスル登山隊の準備その他について」松田雄一氏

主として報告書などにみられないものについて、今までの準備過程からどういふふうにして登るかについて報告すると前置きされ、まず第三次登山隊の準備委員会の性質からその準備状況、装備、食糧、梱包など各部門にわたり詳細な報告が発表された。特に酸素器具についてはくわしい説明があり結論的にいうと今度の計画はすべて酸素を使うということを前提として立てられていると具体的に述べられた。なお最高所に使用される二人用天幕が特に会場に張られ、講師とのあいだに熱心な質疑応答が行われ、充実した小集合であつた。

圖書寄贈

文化人名録(社団法人日本著作権協議会)
著作権協議会概要(社団法人日本著作権協議会) 以上松方三郎氏
九州山岳大観(加藤数功著)
祖母山群(加藤数功著)
万年山(九重観光協会)
以上加藤数功氏
富士に眠る仲間へ(日大山岳部)
日大山岳部殿
国立公園の施設(国立公園協会)
山岳の驚異(村井米子著)
以上村井米子氏
山岳歌曲集(早川義郎氏著)
早川義郎氏
山地地理学(農林協会)
沼倉寛二郎氏
Appalachia (December 1955)
Appalachian Mountain Club.
Alpine Journal(November 1955)
Alpine Club. The Mountain
World (1953, 1954) Swiss Founda-
tion for Alpine Research.
Een Halve Eeuw Nederlands
Alpinisme (1902-1952)
オランダ山岳会

マナスル登山隊寄附

(敬称略)
▽千円 長岡女子高校山岳部代表
細具 一郎
▽六百五十円 渡辺 敏夫
飯塚 重雄
▽二百円 永谷 義三
二階堂政雄
▽二百円 秋和英一郎
累計一万九千五百五十円
▽七千四百五十円(マナスル登山
隊壮行会当日募金箱より)

圖書基金寄附(敬称略)

▽五百円 吉田 竹志
中央気象台山岳部
▽四百円 小野 一丸
松井 啓祐
▽二百円 鈴木 正規
太田 光弘
▽二百円 浜松高校山岳部
累計二万四千二百円

ヒマラヤ登山展覧会

ヒマラヤ・ソサイアティ主催の
登山展覧会に本会ではナンダコー
ト(堀田弥一氏)アンナブルナ
(今西寿雄氏)マナスル、ガネッ
シュ・ヒマール(毎日新聞)の写
真を外務省を通じて出品したが、こ
のほど外務省情報文化局から来る
五月十四日から二十日までポンベ
イの Cowasjee Jahangru Art
Gallery に展覧する旨連絡があつ
た。

登山全書発行

このほど河出書房より本会監修
川崎隆章氏編集により登山全書六
巻を発行することになった。内容
は高校生向の登山の基礎知識を主

として取りあげることにし、第一
巻配本は四月二十五日、以後毎月
一巻ずつ配本の予定で定価は百八
十円、本会の監修は渡辺公平、折
井健一、山崎安治の三氏が当つて
いる。

ヒマラヤ準備委員会解散 ヒマ
ラヤ準備委員会は二月十一日をも
つて解散することになり、横町ビ
ル二階の事務所を引はらい、以後
の事務は成瀬岩雄、石坂昭二郎両
氏が取扱うことになった。また事
務所は本会ルームに移った。

津軽書記辞任 永らく本会書記
としてお骨折を願つた津軽不二雄
氏は病氣静養のためこのほど辞任
され、四月一日よりもと日本バス
ケットボール協会におられた北河
厚景寿氏が本会書記に就任される
ことになった。なお当分の間佐藤
範子氏には北河原氏のお手伝をし
ていただくことになっている。

編集後記 渡辺氏より編集を引
ついで四号目です。なるべく会の
動きにマッチしたものは思つて
いますが、仲々思うようにいきま
せん。会員諸氏のご協力をお願い
する次第。マナスル隊の現地便り
も続々到着しており次号にのせる
つもりです。(山崎)

昭和三十一年三月廿五日発行

東京都千代田区
神田駿河臺四ノ六

社団法人 日本山岳会

編集者 山崎 安治

頒価二十円 電話神田(三)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂

R. ピ テ イ 山 地 地 理 学

Mountain Geography A Critique and Field Study

農学博士 奥 田 或 理学博士 上野福男共訳
A 5 判300頁 写真図版多数 定価350円 送料24円

待 望 の 名 著 初 邦 訳

オハイオ大学教授R・ピテイの「山地地理学」は山
地研究における広範な問題を網羅して体系化した古典
的名著として定評があり、かねてからその邦訳が熱望
されておりましたが、このほど岐阜大学農学部農学博
士奥田或、農林省農業技術研究所理学博士上野福男両
氏の極めて良心的な協働につれて、この名著の本邦初訳
が実現しました。

原書はハーバード・プレスですが既に品切で、渡来
の部数は僅かに数冊という稀少本です。この訳書
は、地理学の貴重文献として、大学用テキストとし
て、農林行政の参考書として、また登山家や山岳愛好
家の教養書として忽ち大きな役割を果たすことになり
ました。

(本書の内容) (序論) 山地について (1) 山地の気温
(2) 温度と降雨量 (3) 風、雲及び日照 (4) 植物地帯と
耕地の高度限界 (5) 森林とその意義 (6) アルプ牧場組
織 (7) 土地利用と経済 (8) 山地人口とその分布 (9) 政
治的諸問題 (10) 山地生活の性格 (各章別および付録に
豊富な参考文献・ノートあり)

日 本 図 書 館 協 会 選 定 図 書

東京都千代田区 財団法人 農林協会 振替東京
震ヶ関(農林省内) 図法 71827

登山用具の専門店

好日山荘

プライスリスト進呈

東京店 海野治良
中央区銀座西二ノ五 電話千橋(56)3600
大阪店 西岡一雄
北區堂ビル前 協和銀行三階
神戸店 島田眞之助
生田區三宮町一ノ三二ノ一